



出撃前に子犬と遊ぶ隊員たち

出撃を明日にひかえた夜みた夢は、敵空母轟沈か、それとも母の夢か、やさしかったおかあさん
親不孝をわびつつ
つい「おかあさん」と呼んだかもしれない
隊員はまだ若かった。
極限の世界の中で母の面影のみが、彼らの心の中を占めていた。
「永遠の母」それは隊員のみが知っている。



【三角兵舎導標(南九州市/旧知覧町)より抜粋】

若かった特攻隊員たち

特攻隊員の多くが18〜22歳という若さでした。戦争の時代に生まれ、死に直面した隊員たちは、どんな思いで敵艦に突入していったのでしょうか。また、愛しいわが子からの感謝と最期の言葉を知らされたときの父母の心境を思うと、胸が張り裂けそうになります。今を生きているわたしたちは、往事の思いに触れることで、平和のありがたさをかみしめることができます。鹿児島県南九州市にある知覧特攻平和会館に



出撃前夜(うでずもう)

お母さん江
思えば幼い頃から随分と心配ばかりおかけしましたね。腕白をしたり、また何時も不平ばかり言ったり。眼を閉じると子供の頃のことが、不思議な位ありありと頭に浮かんで参ります。…家を出発する時、台所でお母さんが涙を流されたのが、東京にいる間頭に焼きついて、あの頃どんなに帰りたいかた事かもしませんでした。お母さんの本気の有難味が解った



別れの杯

のは東京へ出てからでした。あれから余り家に居る事もなく、ゆっくりお母さんに親孝行をする機会がなくなってた事だけ残念です。軍隊に入ってお母さんにお会いしたのは三度です。一度は去年の休暇、二度目は去年の暮近く館林まで来ていただいた時、あの時は新平嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。態々長い旅をリュックサックを背負って会いに来て下さったお母さんを見、何か言うに涙が出そうで、つい、わざわざ来なくても良かったのに等と口では反対の事を言って、まったりして申し訳ありませんでした。…日本一のお母さんを持った新平は常に幸福でした。…出陣にさわしく快晴です。いよいよ本日十二時出撃です。新平最後の親孝行に何時も笑顔で元気で出発致します



↑今生の別れを告げた隊員が乗る特攻機に手を振り続ける女生徒たち。特攻の基地では、このような決別の光景が幾度も繰り返された。

人たちも多くいました。悪質な青少年犯罪が報道などで頻りに伝えられている現在、若者の近況を知るにつれ、それらの「現実」が、時代の違い、環境の違いというところで割り切れることではないと、考えさせられます。「今の人たちは理解できないだろうけど、当時は、日本が戦争に負けたら、女も子どもも殺される。自分が盾になって死ぬしかない。そういう時代でした。…阿部さんは芦刈大尉の遺影を眺めながら、あのころを振り返りました。
夢と希望を持ち、大いなる可能性を秘めた若者たちが、自らの命をなげうって守ろうとしたこの国、郷土、家族。わたしたちは、過去の大きな代償のもとに今の平和があることを決して忘れてはなりません。



芦刈茂金 大尉と陸軍4式戦闘機 疾風(はやて)

昭和20年6月8日、沖縄戦で第59振武隊として出撃し、23歳で戦死した金田出身の特攻隊員・芦刈茂金大尉(戦死時の階級)。当時日本最速の戦闘機「疾風」に乗り込み、都城東基地から飛び立った。辞世の句は「黒潮の驪りと消えむこの五體 彌栄えます御代を祈りて」

芦刈茂金、郷土を想い沖縄の海に散った

特攻

少年の翼で、子どもたちが学んだ壮絶な沖縄戦。そこで日本軍は爆弾とともに自らを犠牲にして敵艦に突っ込む「特攻隊」を次々と編成します。その南の空と海で散った多くの隊員の中に、福岡町金田出身の芦刈茂金大尉がいました。



芦刈茂金を幼く見た阿部重宏さん(金田)

死
を覚悟して敵艦に突っ込む特攻隊、通称「特攻」。太平洋戦争末期の約10か月間、特に沖縄防衛戦では、陸海軍ともに特攻隊が大量投入されました。航空機による戦死者は約4千人、人間魚雷「回天」、水上特攻艇「震洋」などを合わせるに5千8百人以上になると言われています。沖縄海域に近いため、九州には特攻隊出撃基地のほとんどが集中。九州出身の隊員も多く、戦死者は東京都に次いで、福岡県出身者が2233人にも上りました。志願制とされる特攻隊ですが、実際は希望者以外も少なくなかったようです。
当初は戦果も著しかった特攻ですが、敵軍の対策も向上し、次第に成功する率は下がっていきます。沖縄周辺では、海軍が940機、陸軍が887機の特攻作戦を実施。そのうち命中は133機、至近弾となったのが122機、命中の率でいえば7.27%でした。海軍では2千45人、陸軍では1千22人がこのときの特攻で命を落しました。

家族への手紙放つて 金田上空で決別の旋回

国のため、親兄弟のために、片道分の燃料で飛び立ち、戦死していった特攻隊員たち。そのなかで、福岡町金田で生まれ育った芦刈茂金大尉(本籍・行橋市)がいます。金田尋常高等小学校で同級生だった金田の阿部重宏さん(福岡神社前町)も、金田はかつての彼の面影をしのびました。
「芦刈は成績も良く、学校では級長をしていました。彼が特攻で戦死したことを知り、衝撃を受けましたよ」
当時、金田の敷島交差点のそばには「敷島座」という映画館があり、芦刈大尉の父がその経営にたずさわっていましたが、阿部さんとは家も近く、幼いころは、福岡神社でよく一緒に遊んだそうです。内地の兵役から帰った阿部さんは、地元の人から芦刈大尉の話聞き、心打られました。
「特攻隊員になることが決まった芦刈は、満州から特攻基地がある都城(宮崎県)に戦闘機に向かう途中、金田の上空を通過したそうで、その時実家の上空を旋回し、自分のブーツに両親への手紙を入れて落とすと聞きました。家族に最後の別れを告げたのでしよう。それ以来、彼は二度と帰らぬ人となってしまいました」
特攻という「事実」、当時の人々に刻まれた「記憶」を単なる「歴史」にしてはならない。…特攻隊員には10代の